みんなで翻刻

●これまでとこれから

加納靖之（京都大学防災研究所／京都大学古地震研究会）

「みんなで翻刻」のこれまで

「みんなで翻刻」（▼注1）は、二〇一七年一月に公開した、多くの人がオンラインで参加して文献史料を翻刻するプロジェクトである。二〇一七年十月現在、サイトにログインした方が三千三百人を越え、そのうち、実際に文字を入力した方は三百人以上になる。全体の入力文字数は三百万文字を超え、「翻刻完了」（一通り文字が入った状態）になった文書は、二百五十七点、画像のコマ数では四千四百七十七コマである。

「みんなで翻刻」は、京都大学古地震研究会の活動から生まれた。開発・運用メンバーの一員としての立場から簡単に経緯を紹介したい（▼注2）。古地震研究会は、当初、主として理学部に所属する研究者や学生が、歴史学の研究者を先生役に、翻刻や史料解読の勉強をするという形での研究会であった。徐々に参加者が増えるなかで、人文情報学の研究者との出会いがあり、解読作業への情報技術の活用についての情報交換がはじまった。橋本雄太氏（「KuLA」「みんなで翻刻」開発担当。現在は国立歴史民俗博物館・助教）が研究会に参加したのもこの頃である。もともと研究会ではデジタル画像やワープロソフトなどを用いて解読作業をしており、また解読結果もクラウドサービスで共有するなど、情報技術の活用には関心が高かった。研究会の合間に、あるいは、「情報科」と題して主として情報技術の活用について議論する回を設けて議論するなかで、「みんなで翻刻」がつくられていった。

「みんなで翻刻」は、オープンサイエンスの観点からも注目していただいているが、最初のアイデアは必ずしも「オープン」な指向のものではなかったと思う。ごく初期のアイデアは、中西一郎氏（京都大学大学院理学研究科・教授）が提出されたものと記憶しているが、「離れた場所にいる研究者が、オンラインで議論し助け合いながら解読作業をするような仕組みを作れないか」というものだった（▼注3）。古地震研究に関わる研究者がそれほど多くはない状況で、毎週の古地震研究会の勉強会を、別の大学の研究者とも共有できれば、各大学やその周辺の資料館等が所蔵する史料を解読し、古地震研究を推進できるのでは

図1 「みんなで翻刻」ホーム画面

ないか、という考え方である。その後、非専門家をも巻きこんだ、「みんなで」翻刻をするプロジェクトへと成長していくことになるのだが、それを後押しした状況のひとつは、くずし字学習支援アプリ「ＫｕＬＡ」の公開と快進撃ではないかと考えている。「ＫｕＬＡ」は飯倉洋一氏（大阪大学大学院文学研究科・教授）を中心とするプロジェクト「日本の歴史的典籍に関する国際的教育プログラムの開発」）で開発されたが、古地震研究会と「ＫｕＬＡ」開発メンバーとに橋本氏が入っていたこともあり、当初から情報交換を行なっていた。「ＫｕＬＡ」が多くの非専門家に受け入れられていく様子をみて、専門家に限定しない「みんなで翻刻」の方向性が見えてきたのである。

ここで、古地震研究会と「みんなで翻刻」に関する出来事を、年表に整理しておく。

二〇一二年四月	古地震研究会（週一回の勉強会）がはじまる。主催は、京都大学大学院理学研究科中西一郎教授と加納。
二〇一四年春	人文情報学や科学史の研究者が参加する。
二〇一四年九月	初の古地震研究会「合宿」（三日間連続の勉強会）、つくばでも古地震研究会がはじまる。
二〇一六年二月	「ＫｕＬＡ」リリース（研究代表：飯倉洋一教授）。
二〇一六年春	「みんなで翻刻」の開発にとりかかる。
二〇一七年一月	「みんなで翻刻【地震史料】」公開。
二〇一七年三月	「京大×niconico【みんなで翻刻してみた】」の第一回放送（▼注4）。株式会社ドワンゴが提供する「ニコニコ生放送」での番組。以降、二〇一七年七月の第六回まで放送済。
二〇一七年四月	「ニコニコ超会議」に出展する。
二〇一七年六月	最初に公開した百十四点の史料がすべて「翻刻完了」になる。以後、ステージ二、三、四、五として順次史料を追加。

「みんなで翻刻」の実力

現在、翻刻の対象として利用させていただいている東京大学地震研究所の所蔵史料のデジタル画像は、およそ四百点だが、その全点の「翻刻完了」が視野にはいってきている。多くの参加者を得て、多くの史料を「みんな」の力で翻刻することができ、市民参加型の研究プロジェクトとしては成功といえる、との評価もいただいているし、実際に「みんな」の力で「翻刻」を通した研究や学習の場を提供できたという自負もある。しかし、何らかの形で翻刻に携わっている方々は、翻刻の正確さも気になるようである。ここで少し分析してみたい。

「みんなで翻刻」には多くの方が参加しておられ、（一人一人確認したわけではないが）その翻刻の実力も千差万別であると思われる。はじめたばかり、という方から、職業的に翻刻をされている方までおられるようである。実力だけでなく、翻刻に関する興味もおそらく異なる。翻刻の勉強をしたい、腕試しをしたい、「ＫｕＬＡ」がおもしろかった、プロジェクトがおもしろそう、災害に興味がある、などなど。このように多様な人々が参加していることが重要なポイントであると考える。

「みんなで翻刻」は、翻刻作業を多人数で進めることができるような工夫がしてある。タイムライン（最初にログインした画面に最近翻刻された史料・コマが表示される＝図1）、「？」の記入（未読・不確実な場合の記法）、作業履歴の表示（誰がどこをどう入力し、修正したかがわかる＝図2）、コメント（作業終了時に他の参加者へのコメントを付記できる）、「添削希望」ボタン（コメントを書かないまでも、添削を希望する意思を表明できる）、「あっぱれ」（翻刻および添削・修正に対して謝意・好意を表現できる。いわゆる「いいね」）などである。

参加者が翻刻を進めていくのを拝見すると、多様な人々が、

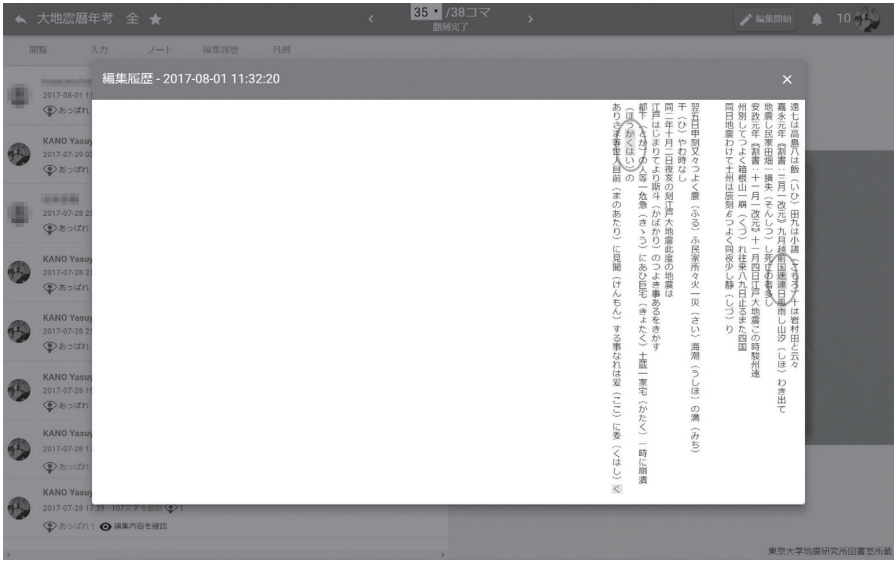

図 2　編集履歴の表示画面。削除箇所に赤，追加箇所に緑の背景色がついている（丸囲み）。

「みんなで翻刻」の機能を利用して、「みんな」で翻刻の正確性向上に貢献している様子がみえてくる。「?」として残した部分や、「添削希望」が表示されたコマは、上級者によって確認・修正がなされる。それに対してコメントや「あっぱれ」で謝意が表明される、といった具合である。「添削希望」と表示されていなくても、タイムラインに表示されたコマや、自分が興味をもっている史料については、やはり他の参加者が、チェックしている。もちろん、最初に翻刻した本人が間違いに気づいて修正される場合もある。このような過程を経て、相当正確な翻刻結果となっていると考えている。

運営側あるいは参加者相互によって翻刻内容を確認した上で、それ以上編集しないことをしめす「確定」という状態を用意してある。現時点では「確定」の基準が未整備のため「確定」したコマは存在しないが、将来的には「確定」により、あるレベルで翻刻作業が終了したことを示すつもりである。なお、「みんなで翻刻」による翻刻結果は、クリエイティブコモンズライセンスにより使用してよいとしているが、「みんなで翻刻」プロジェクトとしてその内容の正確性を保証しているわけではなく、使用する方に確認していただく必要がある。

「みんなで翻刻」のこれから

「みんなで翻刻」のタイトルには、「【地震史料】」と付されているのにお気づきだろうか。古地震研究会での議論がもとになっていること、東京大学地震研究所にデジタル画像化済みのまとまったコレクションが存在したこと、地震などの災害史料には、広く興味をもってもらえる可能性があると考えたこと、などにより、地震・自然災害史料を翻刻するプロジェクトとしてスタートした。現在、地震学、あるいは自然災害科学の観点から、翻刻結果の分析をすすめている。

さて、デジタル画像になっている未翻刻の史料は世の中に数多く存在するだろう。「みんなで翻刻」の基本的な仕組みは、どんな史料に対しても利用することができる。「【地震史料】」は、現行のプロジェクトの立ち位置をはっきりさせるとともに、この部分を別の史料群に変えたプロジェクトにも広がっていってほしいという希望も込めた表記なのである。「みんなで翻刻」の他方面への活用や、さらなる発展に関心のある方は、ぜひご連絡をいただきたい。また、一人の参加者として「みんな」に加わっていただくのも大歓迎である。

（注1）：https://honkoku.org/。参加には、Ｔｗｉｔｔｅｒ等のＳＮＳアカウントが必要。

（注2）：以下の記事にも古地震研究会や「みんなで翻刻」が紹介されている。京都大学学術研究支援室（二〇一六）「時代と文化を越えて『読む』」（http://research.kyoto-u.ac.jp/documentary/reading/01/）。京都大学古地震研究会（二〇一七）「『みんなで翻刻』―市民参加のオンライン翻刻プロジェクト―」地震本部ニュース、平成29年夏号。磯辺康子（二〇一七）「古文書解読アプリから広がる災害研究　京都大学古地震研究会『みんなで翻刻』プロジェクト」震災学 vol11。

（注3）ご本人によれば、二〇一三年一月の「第97回人文科学とコンピュータ研究発表会」で行なわれた複数の発表に大いに刺激を受けたとのことである。

（注4）：http://live.nicovideo.jp/watch/lv290610859

■みんなで翻刻・古地震研究会へのお問い合わせ

・ウェブサイト　http://kozisin.info/contact/

・住所　〒611-0011 宇治市五ケ庄
京都大学防災研究所附属地震予知研究センター 加納

■コラム　執筆者プロフィール

加納靖之（かのう・やすゆき）京都大学防災研究所助教／京都大学古地震研究会。「1831年（天保2年）佐賀の地震記録が会津の地震のものである可能性」（『地震』70、二〇一七）、「地震年表や史料集における年月日の取り違え」（『歴史地震』32、二〇一七）、「弘化四年（1847年）越後高田の地震における年月日の取り違え」（『地震』69、二〇一六）などなど。